「微妙な状態です。テルテル坊主が必要そうです。」と言いながら校長室を訪れた天野教頭。その後、「そういえば、テルテル坊主って、何時代からあるのでしょうね。日本が発祥でしょうか？」と。

「確か平安時代辺りじゃなかったかしら。発祥は日本ではなく、中国のはず。」と、即答したものの一抹の不安が…。

家に帰り、何冊か本を調べてみました。確か家にある本のどこかで見たような記憶があったのです。昔ならこの本のこの辺りに書いてあったはずだと、即座に本を引っ張り出せたものでしたが、七冊見ても出てきません。老化現象か…。「廊下に立っていなさい！」と、昔、言われたり、言ったりしたっけと、独り言ちながら、八冊目で見つけました。

その本、『知れば恐ろしい日本人の風習』千葉公慈著　河出書房新社によると、「てるてる坊主の起源は、どこにあるのだろうか。結論からいえば、いつの時代から始まったのかははっきりしていない。ただ平安時代の『蜻蛉（かげろう）日記』には、すでにてるてる坊主をつるして晴天を祈る慣習が著されている。その頃は「照る照る法師」とか「照り照り法師」、もしくは「照れ照れ法師」などと呼ばれていた。

さらに起源をたどれば、それは中国の伝説上の人物『掃晴娘（サオチンニャン）』がルーツだとされる。紙のほうきを持った娘姿の人形の掃晴娘は、やはりつるして晴天を祈願する人形のタイプである。」

掃晴娘は、両手に持っている竹ぼうきで、雲や風を追い立てるとされ、中国では切り紙（絵）で作り、門の端につるして晴天を願っていたようです。

江戸時代に入ると、テルテル坊主は晴天になり、**願いがかなったところで初めて両目を入れる**しきたりになり（願いがかなってから片目を入れるダルマに似ています）、地方によっては、お神酒(みき)をかけて人形の労をねぎらい、それから川に流すところもあったようです。子どもの頃、こんなことは知らずに、テルテル坊主の顔に初めから「へのへのもへじ」と、目鼻を書いていたような気がします。

天野教頭がテルテル坊主に頼ろうとしているのは、何を隠そう、今週末の土曜、二十四日に、「プレーデー」が予定されているからなのです。このプレーデーというのは、『立教小学校五十年誌』の豆辞典によると、

「毎年五月に行われる立教女学院と本校の合同運動会のこと。一回生が三年生になったばかりの一九五〇（昭和二十五）年から、有賀千代吉先生の発案で始まった。今は現地集合現地解散だが、当時は貸し切りバス十二台で繰り込んだとか。その後、会場は交互に使っている。当初は合同運動会とよんでいたが、秋の運動会と混同しないように、一九五五(昭和三十）年からプレーデーとよぶようになった。人気プログラムは、七夕のように年に一度、男の子と女の子が踊る各学年のフォークダンス。一年生の「ぴょんぴょんとんで」から六年生の「トロイカ」まで、曲も踊りも変わらないので、わが子が女学院の子と手をつないで行進を始めたところで、自分の幼いころを思い出して涙ぐむＯＢ・ＯＧもいる。」

今年のプレーデーは、第七十五回。豆辞典に、「会場は交互に使っている。」とありますが、引っ越し中の目白校舎が手狭のため、昨年・今年、それから来年までは女学院さんを会場として開催される予定です。その後三年間は、恩返しのため、池袋の新校舎に女学院の皆様をお迎えすることになるでしょう。

実際、涙ぐむ保護者の方がいらっしゃるかどうかは定かではありませんが、プレーデーで踊った女学院のお嬢さんと大学で再会し、結婚に至ったというカップルを私は複数存じ上げております。年に一度、七夕のようなプレーデー。どうかテルテル坊主に、両目を入れることができますように…。

（立教小学校校長　田代　正行）